

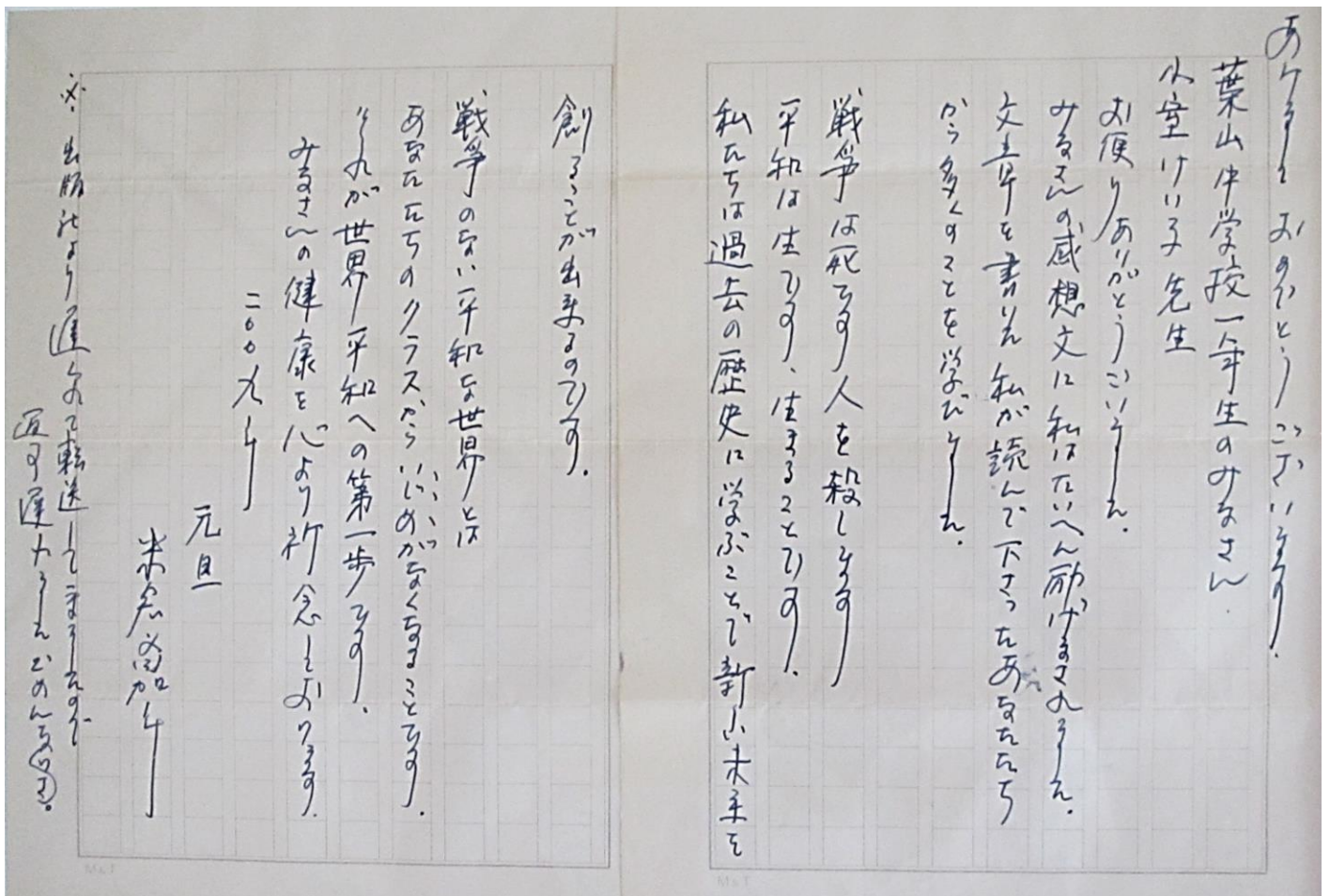
21年目の葉山

村山市立葉山中学校
学校だより
第9号
令和6年8月27日

届けられた“手紙”から…

校長 富塚 義幸

先日、平成20年から2年間葉山中学校に勤務された、小室けい子先生（元教頭・国語担当）が来校されました。当時、1年生と学習した国語教材『大人になれなかった弟たちに……』の作者である米倉齊加年（よねくらまさかね）さんに生徒の感想文を送ったところ、ご本人から手紙が届いたのだそうです。その手紙をこれまで大切に保管してきたのですが、国語教材として現在もこの作品が教科書にあることを知り、「葉山中学校の皆さんに活用してほしい」という思いでわざわざ届けてくださいました。その手紙を受け取った時、私は少し涙が出てきました。出典である絵本『おとなになれなかった弟たちに……』を読んだことがあり、冒頭の「僕の弟の名前は、ヒロユキといいます。」からのあらすじと挿し絵が一気に思い出されたからです。教科書で作品を読んだ際、2・3年生はどんな感想を持ちましたか？届けられた手紙を紹介します。



【米倉齊加年さんの紹介】

1934年（昭和9年）福岡県に生まれる。2014年（平成26年）没。劇団民藝に所属。俳優・演出家、絵本作家として活躍。絵本作家として、ポローニャ国際児童書展グラフィック大賞を『魔法おしえます』（偕成社）、『多毛留』（偕成社）で2年連続受賞。

特集：夏休みのチャレンジ！“作品紹介”

＝『母へ』＝少年の主張村山地区大会で発表した外野 唯さん（3年）の作品を紹介します。



サイレンが鳴る。「あ、もう試合終わったんだ。」最後のあいさつを終え荷物を片づけている途中、涙があふれて止まらなかった。中学での部活動が終わった瞬間だった。野球……。皆さんも一度は試合を見たことがあるだろう。白球を追いかけ、仲間と共に苦しい時も楽しい時も練習に励む競技だ。私にとって、野球は幼いころから身近だった。兄の影響である。練習や試合があれば、兄の応援に出かけた。「かっこいいなあ。」そんな風に思いながら眺めていたのを覚えている。そんな私が、中学生になり、体験として野球部に行くことは、ごく自然なことだった。「バット振ってみる？」先輩に渡されたバットを振ってみた。重い。うまく振れているかも分らぬまま、ボールをトスしてもらった。ボールが遠くまで飛んでいく。心地よさと嬉しさと最高の気分だった。「野球部入るよ。」そう母に告げると、「そう。頑張るね。」と、すぐに受け入れてくれた。そのときから、母は私の「一番の応援団」となった。入部してから、野球に打ち込む日々が始まる。守備や走塁の練習に励んだ。その中でも一番好きなのが打撃練習だ。特に、鋭い打球が飛んだときは、爽快感で心も体も軽くなる。逆に、うまくいかないときは心も体も重くなる。何も話したくなくなる。そんな無言の私を、黙って受け入れてくれるのは、いつも母だ。迎えの車に乗るとすぐ、その日の調子によって私の態度は変わる。調子のいい時は口数が多い。「打てたよ」「うまくキャッチできたよ」運転する母の横顔に話しかける。「よかったね」その言葉を聞いて私はますます饒舌になる。調子の悪かった時は、ただただ無言。気まずい空気が流れる。隣には何も話さない母の横顔。私の様子を瞬時に察知し、ほめたり黙ったりしている母には、何か特別な能力でもあるのだろうか。私にとって、母と車で過ごす時間は、ありのままの自分を出せる思い出深い時間となった。最後の地区大会。私たちは見事県大会出場を決める。が、私は出場することができなかった。チームが勝つことと私の力を考えると、納得しなければならなかった。県大会まであと一週間となるある日。夜練が終わり、車には母と私の二人。この日、私は母に伝えた。「試合出れないかも。」後輩に、私よりも上手い選手がいるからだ。最近はその後輩が試合に出ることが多かった。すると、母はこう答えた。「そっか。でも、コーチャーも試合に出てるのと同じだからね。」それを聞いて、納得していない自分に気づいた。チームが勝つためなら仕方ない、ずっと応援してくれている母を、がっかりさせたくない、という思いから言ってしまった言葉なのに、「やっぱり試合に出たい」という気持ちがはっきりとしてしまったのだ。「コーチャーとしてではなく、レギュラーとして試合に出たい！」と、母に本音をぶつけたかったが、そのまま私は黙ってしまった。あの日の静かなドライブは、今でも鮮明に覚えている。そして迎えた県大会。私はいつものように母のおにぎりを頬張る。チームは負け、私は、ランナーコーチャーとしての役割を全うした。試合後、「コーチャーも試合に出てるのと同じ」という母の言葉が頭を駆け巡った。「私は試合に出たんだ」母の言葉で、自分を納得させようとしていた。お母さん、最後の試合、私はやっぱり出なかったな。バッターボックスに立つ姿を見せたかった。いつも一番に応援してくれてありがとう。お母さんのおかげで「野球」という、全力で夢中になれるものに出会えたよ。「コーチャーも試合に出ているのと同じ」あの言葉は、どんな状況でも、自分に必ずできることがあるということを知かせてくれた。これからも野球で得たことと母の応援を自信に、夢に向かって頑張っていきたい。